

小田実全集（評論 第19巻）

「べ平連」・回顧録でない回顧（上）



講談社

小田実全集

Makoto Oda



目次

- 1 はじめに・なぜ今書くか 6
- 2 「私は「私たち」になった」 24
- 3 「被害者」「加害者」としての「難死」 42
- 4 ふつうの人間の「すべて人間として生きようとする努力」 60
- 5 「われわれ」のデモ行進 80
- 6 暴力・非暴力・反暴力 98
- 7 「ベトナム」のよみがえりのまえで 117
- 8 「六〇年安保」「七〇年安保」「九〇年安保」 135
- 9 「ふつうの人間」の「国際連帯」 154
- 10 「脱走兵」という「現物」 173
- 番外編 カザフから激動を考える 192
- 11 日本人「脱走兵」が明確にする今日の問題 220
- 12 感動と行為の連鎖反応 238
- 13 背中をくつつけあっていた 256

14	「湾岸戦争」「太平洋戦争」ベトナム戦争
15	《euphoria》のあとで
16	《euphoria》のあとの重い旅

「べ平連」・回顧録でない回顧(上)

1 はじめに・なぜ今書くか

1

「ベ平連」——『ベトナムに平和を！』市民連合」の運動について、あらためてふり返って考えてみたいと以前から思っていた。それが、ぜひとも今、というほどの痛切な思いになったのは最近のことだ。ふり返って考え、書くことと考えることは結びついている。書くことで新しく見えて来ることもあるし、考えがしつかりさだまることもある。その期待もあつて、私はこれからしばらく当時見たこと、感じたこと、考えたこととともに、今ふり返って見て、感じ、考えることを書く。もちろん、「ベ平連」について書くことは、ベトナム戦争のことにも当時の世の動き、他の運動の動きにも触れることである。ただ、基本は「ベ平連」におきたい。しかし、なぜ今書くか。——

何ごとであれ、ものごとを的確にとらえるのには一定の距離がある。私自身が「言い出しべえ」のひとりともなればキモイリ役のひとりともなつて形成に参加した「ベ平連」の運動が始まったのは、一九六五年四月二四日、千五百人の市民が東京赤坂の清水谷公園に集まり、集会のあと、「ベトナムに平和を！」を共通の旗じるしにしてデモ行進して歩いたときだった。運動がそれ自体としては終わったのは、「ベトナム停戦協定」調印のあと二年たった一九七四年はじめのことだったから（一月二六日に、東京の「ベ平連」は「解散」の「大集会」を開いている）、その年からさえずりに十六年が経つ

ている。十六年は決して短い年月ではない。それだけの時間のへだたりは、「ベ平連」のことであれ、何んについてであれ、ものごとを大きく見まわして骨太に問題をとらえるのに十分な距離だろう。そして、これ以上時間が経ってしまえば、問題の把握に大観と同時に必要な細部の知識もぼやければ、現場の体感も記憶から消える。そう考えれば、「ベ平連」のことを書くのに、今はなかなかいい時期であるにちがいない。

ただ、私はここでちょうどいい時間のへだたりができたから「回顧録」を書こうとしているのではない。そういう気持で「回顧録」を書くのには、私の気持は今少しせつぱつまっている。あの運動が何んであったか、あるいは、何んでなかったのか。何をしたのか、しなかったのか。何ができて、できなかったのか。どんなすばらしいことをしたか。逆にどんなくだらないことをやってのけたのか——これらは「回顧録」の出口のない過去のなかにおさめるには、あまりに強く現在にも未来にも結びついているように見える。すべてがそうだとはいわない。そのうちのあるもの——たぶんかんじんカナメになるものはそうした現在、未来への結びつきを持つているように見える。そしてまた、そうしたものは、私個人、あるいは、「ベ平連」の運動のワク組みを超えて、世の多くのことさらに結びついている。べつに運動むきのことだけを言おうとしているのではない。また、日本のものごとだけのことではない。大げさ、傲慢なことを私はここで言おうとしているのではない。ただ、「ベ平連」の運動のなかで私自身をふくめて人びとが考え、求め、かかわろうとしたことのなかには、現在、未来にそのままつながって来るものもあれば、人間の共通の問題として世界大にひろがるものもあったということだ。この私の思いは決して軽やかな思いではない。そう考え、求め、かかわろうとしたこ

との多くがそのまま課題として私のまえに残されている、そう私を感じとっているゆえにもつと重い、しんどい思いだ。

この思いあつて、私は『「ベ平連」・回顧録でない回顧』という奇妙な題をこの文章につけた。過去のくだらないことも「回顧録」の金庫の厚い扉のなかに放り込んでしまえば、それはただの金庫の持ち主の個人的な過去としてけりがつく。しかし、金庫がなければ、回顧はそのまま私が今もつてそのくだらないことにも直面していなければならぬことを強いる。そして、それは私だけが直面していることではないだろう。日本のあちこち、世界のあちこちで多くの人が直面していることでもある。私はそれだけのふり幅の広さをもつものとしても、この回顧を行ないたい。その思いもあつて、私はこのいささか風変りな題をつけた。

2

ここでひとつおことわりしておきたいことがある。それは、運動のなかでキモイリ役の私が懸命に主張し、他の人たちもおそらくそれぞれに同じように考えていたように、「ベ平連」の運動があくまで運動に加わる人の自発的意志と「個人原理」に基いた運動であつたことだ。デモ行進にやつて来る人の主義主張を問題にしたことはなかつたし、また、デモ行進への「日当動員」など「ベ平連」では考えられもしなかつたことだつた。事務所でも、誰もが無給、文字通り手弁当で働いていたから、それをまったく当然のこととしていたから、おどろくべき少額の予算で運動をつづけられたにちがいない。さつきの言い方を少しかえて言えば、「ベ平連」は参加者ひとりひとりの「私」に基本をさだめ

た運動だった。「私」は顔かたちがちがつているように思想信条もちがつている。そのひとりひとりがつている「私」が「北爆」——アメリカ合州国の当時の「北ベトナム」爆撃（これが「ベ平連」の運動の最初のきっかけであった）に怒り、「ベトナムに平和を！」の志をもつことで、他のあまたの「私」とつながり、運動を形成する。大きくまとめ上げて言えば、これが「ベ平連」の運動の原理でもあれば、かなりな程度、その実際のありようだったにちがいない。運動にやつて来た人たちは、この原理を基本の共通の了解事項としていたように見える。「ベ平連」の正式名称は、はじめは『ベトナムに平和を！』市民文化団体連合」であつた。それを一年半後、「市民連合」という原理と実際のありようにふさわしい名称にしたのだが、誰がどのようにしてそう提案してそうなつたのか、私も他のかつての仲間もまるつきりおぼえていないのを見ると、その原理も実際の運動のありようもすでに論議するにはあまりにも当然のことになっていたにちがいない。東京の「ベ平連」が六五年一〇月以来毎月出していた「ベ平連ニュース」の最終号（二〇一号だつた）に、私は九年近い運動のまとめとして、自分たちの運動は、ひとりひとりが「私」としてある「衆生」が「衆知」を集め、さらには「衆金」も出しあい、「衆力」でかたちづくつた運動だという意味のことを書いていた（二九七四年三月号）。これはそのときの私なりのかけ値なしの正直な感想だつたが、運動の参加者たちの多くが同じ感慨をもつたのでないかと思う。

それは、ことばをかえて言えば、私自身をふくめて「衆生」がそれぞれに自分独自の「私のベ平連」をかたちづくつていたことだ。この「私のベ平連」があまた集まつて、「ベ平連」の全体の運動をつくり上げる。もちろん、実際にことがすべてそんなふうにして動いていたわけではない。ただ、その

原理はおしまいまで運動の基底にあったし、あり得たように思う。

そうだとすれば、これから私が書くこととして、基本はあくまで私自身の「私のベ平連」だ。その基本にもとづいて、私は「ベ平連」をふり返って考え、書く。「ベ平連」の運動にやって来た人たちが、自らの「私のベ平連」行為によって運動をかたちづくった人たちに私が同じ試みを期待するのは、それによつてあちこちにそれぞれの流儀でひろがったこの運動の全体の姿かたちがあきらかにできると考えるからだ。いや、それによつてのみ、運動の意味もたしかなものとしてとらえられ得るにちがいない。この私の「回顧録でない回顧」がそのこれからなされるであろう多くの試みのさそい水ともなればきつかけともなればよい。その望みが、今、私にはある。

3

次のように言えば、私が述べたいことはさらにはつきりするにちがいない。「ベ平連」という過去が「回顧録」の金庫におさめきれないものとしてあると言つても、運動自体が現在、未来につながっているのではない。運動がもたらした成果とともに、運動がもたらさなかつたもの——問題、矛盾、欠陥においてもその現在、未来とのつながりはある。私は成果を否定しない。しかし、問題、矛盾、欠陥も否定しない。成果とともに、問題、矛盾、欠陥は数多くあり、その多くにおいても、現在、未来に結びついている。

たとえば、「市民」、そしてまた、その「市民」がかたちづくる「市民運動」にかかわつてのことだ。「ベ平連」はよく「市民運動の元祖」というような言い方をされるのだが、私はその言い方はあ

ながち的外れでないと思う。もちろん、「市民運動」という、今日ではまったくあたりまえのことばとして扱われていいにつけわるいにつけかつての衝撃力を失なってしまった政治運動は「ベ平連」のまえにもあった（「ベ平連」の直接の「先達」として六〇年の「安保闘争」での「市民運動」の盛り上がりがあった）。しかし、それをよりはつきりしたかたちで日本の社会のなかに存在させ、あえて挑発的な言い方を使って言えば、はやらせたのは「ベ平連」の運動だったにちがいない。あるいは、「市民運動」を形成するもととなる「市民」も、たとえばフランス革命を講ずる大学教授の語彙のなかにあっても、かつてはふつうには使われていなかった、使えば奇異にもキザつたらしく耳にひびくことばだった。そのフランス革命を講ずる大学教授は、このついでにフランスにはこんなふうにして圧制に怒って立ち上った「市民」がいたが、日本にはそもそも「市民」はいないのでと教室で重々しく学生に告げていたかも知れない。しかし、まぎれもない日本の「市民」が——「市民」としか言いようのない人たちが、「北爆」に怒り、日本の戦争への負担に反対して日本各地で「ベ平連」の集会に集まり、デモ行進をして歩いた。それは日本の「市民」に新しい概念をあたえたかも知れない。私がここで苦笑まじりに思い出すのは、当時、いろんな集会で、たとえば、学生運動の「セクト」の代表が、「本日ここに結集した学生、労働者、市民諸君……」というような言い方で演説をおらび上げていたことだ。たぶん「ベ平連」の出現以前には、彼らの革命的語彙のなかにおしまいの「市民」ということばはなかっただろうと私は考えるのだが、それはいかにもとってつけたようでおかしかった。おそらく彼らにとつて、さまざまに「ベ平連」がさまざまなところでさまざまな活動をくりひろげるまでは、「市民」は彼らの「たたかい」の敵対者でなかったら、ただ彼らの「たたかい」を無関心に見て

いる傍観者であつたにちがいない。それとも、たかだか、彼らの「たたかい」におずおずとつき従う、その意味では彼らの意のままになる同伴者であつても、決して自らの意志と原理に基いて自分で行動する人たちではなかつた。もちろん、こうした「市民」観は、学生運動の活動家たちに限られたことではなかつた。革新政党の指導者も労組の活動家も、学生たちと同じ不信の眼で「市民」を見ていた。「べ平連」の出現以後も、そのありきたりの「市民」観は根本的には変らなかつたように思う。「市民」は、「左翼」の「革命勢力」にとつて、いつだつて「プチ・ブル」とか「小市民」だとかの「差別的」用語と無縁なものではなかつた。しかし、それでも、彼らとともに「たたかい」に「結集」した「べ平連」の市民たちを、彼らは戸惑いながら、それまでの彼らのありきたりの「市民」の概念からはみ出たものとして受けとつていたにちがいない。もうひとつ言えば、よく判らないながら、受けとめざるを得ないものとして、この彼らの「たたかい」の傍観者でもなければ、決して敵対者でもない、さりとて同伴者でもない、彼らとともに、しかし、あくまで自分の意志と原理に基いてデモ行進して歩く「市民」はあつたのだろう。集会で、学生運動の活動家が「本日ここに結集した学生、労働者、市民諸君……」と呼びかけるのを聞くと、私は、いつも彼らの当惑を感じとつていた。そのころのジャーナリズムのはやりのことばを使つて言えば、私はそうした言い方が大嫌いだったのだが、この「行動する市民」「たたかう市民」は、「プチ・ブル」「小市民」と同じなのか、ちがうのか。彼は叫びながら、内心で自問していたにちがいない。

苦笑とともにもうひとつ思い出すことばがある。それは「べ平連」の運動が大きく日本じゆうにひろがつてさかんだころ、警察がデモ行進の規制によく使い出した「一般市民」ということばだ。

同じころ、警察が「行動する学生」「たたかう学生」を行動しない、たたかわないふうの学生から区別し、切り離そうとしてさかんに使っていたのは「一般学生」だが、「一般市民」はこの「一般学生」に照応することばだった。私はデモ行進の現場で何度もこの奇妙なことばを耳にしている。たとえば、「一般市民の方、危険ですからデモ行進に近づかないように」というふうに。このデモ行進は、当時のはやりであった「ゲバ棒」——角材をふりまわす「過激派」のデモ行進ではなかった。突然、交差点で坐り込みをすることはあつても、本質的には非暴力のしずかな「市民」のデモ行進だった。

すくなくとも、「ベ平連」の運動は、「市民」は行動しない、たたかわない（日本の市民）というふうにことを限定してもよいだろう）、むしろ、行動しないことにおいて「市民」は「市民」であるという、世のあまたの革命家、活動家ももち、当の「市民」自身が抱いていた通念をかかなりな程度変えたにちがいない。もちろん、革命家、活動家たちとちがつて、「市民」はいつでも行動しているのでもないし、たたかっているのでもない。しかし、必要あらば、当然、自分の意志、原理に基いて自ら行動し、たたかう——それをひとつの新しい「市民」の概念として日本の社会にそれこそ「市民権」をかかなりな程度得させたのは、「ベ平連」の大きな成果だったと思う。この概念は、はじめはおそらく「市民」も、必要あらばたたかってもよいというほどのおとなしいものだったにちがいない。それが「ベ平連」の運動の拡大、深化とともに、必要あらば市民は行動すべきだ、たたかうべきだ、まさにそこにおいて「市民」は「市民」であるという概念にまでなる。そこまで考えは伸びた。——

もちろん、「ベ平連」の「行動する市民」「たたかう市民」、そのなかでもっとも「ラディカルな」

(當時はやったこのことばを、「過激な」と「根元的な」という二つの意味あいにおいて私はここで使う) 人たちにあつたこうした「市民」についての考え方が、今、日本の社会に定着しているなどと乱暴なことをここで言うつもりはない。ただ、そう「市民」の原理とありようのことを考える。「市民」の数は、このかつて「市民不在」と言われた日本の社会のなかでもかつてとは比較にならないほど多くなつているにちがいない。そのすべてが「ベ平連」の運動のおかげだというようなばかげたことを私は主張するつもりはない。ただ、「ベ平連」の運動がさまざまな活動を通じてその「市民」の原理とありようの大きな実例を人びとのまえにさし示したのはまちがいのない事実だろう。「原発反対」であれ「保育所設置」であれ、「市民」たちが自らの意志と原理に基いて積極的に行動に乗り出し、おのがじし「市民運動」を形成する——これはもう今ではかなりあたりまえになつて来ていることだが、こうした世の中の動きをかたちづくることに「ベ平連」の運動は否定できない大きな役割をはたして来たにちがいない。

問題のふり幅をもう少しひろげて全体としての「市民の動き」のことを考えてみよう。私がここで「市民の動き」と言うのは、たとえば、過日の参議院の選挙で、力のゴリ押しと金まみれの自民党政治に怒つて自らの「反自民」の態度を投票という政治行動によつて明確にした「市民」たちが全体としてつくり出した動きのことだ。彼らはそのときそれぞれが「私の反自民の市民運動」を行なつていたと言えなくもないだろう。その個人個人の「私の反自民の市民運動」があまたあつて、「反自民」の市民の動きが形成される。その形成の基本となるのは、「市民」ひとりひとりの「市民」としての自覚だが、それはまさに「ベ平連」の運動がかつて自らの運動の土台としていたものだった。

ただ、私はこう書いて来たからと言って、「ペ平連」の運動の「成果」を手放して礼讃しようとしているのではない。「成果」のひとつが「市民運動」であり、「市民」を土台にした「市民の動き」だったとすれば、「ペ平連」の運動が持つていた、あるいは、直面した問題、矛盾、欠陥もそこに引き継がれていない保証はない。そして、より根本的に言えば、日本のなかで今これほど「市民運動」がひろがり、「市民の動き」が激しさを加えて来ているとすれば、それはそれだけ政党や労働組合のような既存の「革新」政治勢力が頼みにならない事態になって来ていることでもあれば（時事的な発言をここでしておけば、社会党は、社会党に投票した「市民」のかなりな数が、社会党がたいして頼りにならないことを意識しながらも最後の、そして一縷の望みをかけるようにして社会党に一票を投じたことを忘れてはならない。）、そうした「革新」であれ何であれ、これまでの政治のあり方ではもはや解決できないさまざまな、手ごわい問題に「市民」がそのまま直面していることでもあるにちがいない。

4

「壁」——「ベルリンの壁」が破れたという報道に接したとき、実際に人びとが「壁」の上によじ登って叫び、笑い、泣き、踊るさまをテレビジョンの画面で見るとき、私は思わず涙を流していた。涙は二つの方向を指して流れていた。二つの「市民」の方向を指してである。私は涙を流しながら、そんなふうに自分で感じとつていた。

私がそれほどの激情に駆られていたのには、八五年から八七年まで、私自身が家族とともに西ベルリンに住んでいたという事情がかかわっている。つい先日四歳になった娘もそこで生まれた。西ベル

リンはどこへどう行こうと行き着く先は「壁」だったから、彼女は文字通り「壁」のなかで、「壁」に取り囲まれて誕生したことになる。

私はここで「壁」の由来を今さららしく書くつもりはない（私の西ベルリンぐらしの体験については、直接間接に私は三冊の本を書いている。『ベルリン日録』——講談社。『西ベルリンで見たこと 日本で考えたこと』——毎日新聞社。もう一冊は小説。『ベルリン物語』——集英社。すべてに「壁」がいやおうなしに出現する）。ただ、「壁」へ行くことは、「東」から「西」へむかつて「壁」を越えて移動しようとして「東」の警官なり警備隊なりに射殺された「東」の「市民」たちの「墓標」に行き着くことだったとだけは書いておきたい。実際に死者がそこに葬られているのではなかったから、壁ぎわの「墓標」はあくまで象徴としての意味あいを持つだけの「墓標」だったが、それでもそこで彼らが無残に殺されたことはまぎれもない事実だった。かなり長期間にわたる西ベルリンぐらしでも十分に「壁」に慣れているはずの私が「壁」へ行くたびに息づまる気持になったのは、「壁」が人間の生き死にに直接かかわる場所としてあつたことだ。

そして、いつも無性に腹立たしかつた。殺された「市民」に思いをはせてのことである。いつたい、彼らは何んの罪を犯したことになるのか。彼らはただ「東」の体制が気に入らないと考えただけのことだ。それゆえに「西」へ行こうとした。それだけのことで、彼らは「反国家」「反民族」「反革命」「反社会主義」の「反逆者」となり、あげくのはてに殺される。「壁」ぎわの「墓標」を見てみると、いつも同じ思いが私の胸にわき上つて来た。それは、それだけのことでそうした「殺戮」をやつてのける「国家」、「民族」、「革命」、「社会主義」とはいつたい何か、という思いだった。そこにいくらみご

となことがあると、その「殺戮」だけで、すべてのみごとなことは帳消しになる。「壁」ぎわの「墓標」のまえでの私の思いはいつもその結論になった。

テレビジョンの画面で「壁」の上のよろこぶ人たちを見てみると、彼らの背後に二重うつしするようにならなかつて見た「壁」ぎわの「墓標」が見えて来た。涙にかすんだ眼に、それははつきりと見えた。つい先日まで死の犯罪に値したことが、もう今は何んでもないあたりまえのことになっている。いったい、彼らは何んのために殺されたのだろう。今さらのようにその思いが胸に来た。私の涙はまちがいなく彼らにむけられていた。私の彼らにむかつての涙はただ悲しみのためだけの涙ではなかつた。あきらかに怒りの涙でもあつた。

誰が「壁」を破りこのあたりまえのことを実現させたのか。ゴルバチョフ氏が東ドイツの政治家に圧力をかけたこともあるだろう。新しく出現して来た指導者たちが少しは開明的でもあれば、政治的にも賢明だつたということもあるだろう。しかし、「壁」が破られる数日前に人口百二〇万人の東ベルリンで百万人の「市民」がデモ行進をすることがなければ事態は決してここまで、そしてこんなにも早く進展することはなかつたにちがいない（東京の場合だと、これは千万人がデモ行進して歩いたということだ。かつてニクソン大統領はホワイト・ハウスへの百万人のデモ行進の圧力で、ベトナムへの原爆攻撃をやめたと言われている）。新聞に、東ベルリンからやつて来た女子学生が、国境を開けさせ、ベルリンの壁をこわしたのは自分たち東ドイツの市民たちだと誇り顔に語つたという記事が出ていた。週刊誌の記事には、ドイツにはこれまで革命がなかつた。これこそ東ベルリン市民が自らの手でかちとつた真の革命だと、西ベルリンの男子学生が語つたとあつた。同じ記事のなかで、なる

ほど「東」の経済状態はわるかった、しかし、それだけではなかった。「市民」がバカにされていることへの怒りがあつたと、東ドイツから日本にやって来ていた大学の先生が語っていた。

テレビジョンの画面で「壁」の上によじ登る人たちを見ていて二重うつしするようにして私の涙にかすむ眼に見えて来ていたのは、「墓碑」ばかりではなかった。それよりつい数日前に同じニュース番組の画面でみた東ベルリンでのその百万人の「市民」のデモ行進のさまだった。私の涙はあきらかに彼らにもむけられていた。誰が「壁」で殺されたのか。「市民」である。誰が「壁」を破つたのか。「市民」だ。

私の「人生の同行者」(「つれあい」のことを私はそんなふうと呼ぶ)は、西ベルリンに住んでいるあいだ、「壁」は見るのも辛いと言って、「壁」になるべく近づかないようにしていた。彼女は(在日)朝鮮人だったから、「壁」はただちに彼女の祖国、民族の「分断」を思い出させる――。そう彼女は言い、「壁」への同行を拒んだ。彼女も私のそばで、画面のなかの「壁」によじ登る人たちの姿を見て涙ぐんでいたが、涙の中身には私とちがったものがあつたかも知れない。彼女は何も言わなかったが、私はそう感じた。

5

私も彼女も、西ベルリンにいたとき、「壁」がこんなかたちで破られるとは考えていなかった。いや、ついこのあいだまで、世界の誰もを考えていなかったことだ。信じがたいことが起こった。事態はそ

の一語につきる。――

テレビジョンの画面から眼を離して心が少し落ちついたとき、十何年かまえ、同じように信じがたいこと、世界の誰もが考えていなかったことが起こったのだと、私はあらためて考えていた。サイゴンが陥落して、アメリカ合州国大使館の屋上からヘリコプターでアメリカ合州国人たちが逃げる。あれも、世界の多くの人が――たぶん、「解放」を求めてたたかっていたベトナム人自身を除けば、いや、彼らでさえがそれほど早くとは確信を込めては信じていなかったことだ。「壁」の上で人びとが踊る光景が歴史の転回点を示す光景なら、あの大使館の屋上からアメリカ合州国人たちがヘリコプターで逃げる光景もまた、歴史の転回点をあきらかに示していた。

たしかに、両者ともに信じがたいことが起こっていた。ただ、六月はじめ、私は同じサイゴン――今はホーチミンと名前をあらためた都市のそのかつてのアメリカ合州国大使館からわずかの距離のホテルで日本へかけた電話が日本にかかるのを待っていた。ついでながら言っておくと、かつてのアメリカ合州国大使館は石油関係の役所にかわってしまっている。電話の目的は、北京の天安門広場で何が起こったのかをくわしく聞くためだった。

かつて――これもかつてアメリカ合州国最大の基地があつたダナンで、私は「天安門事件」の話を偶然行きあつた日本の通信社の特派員の口から、その前日にはじめて耳にした。人気のない、うす暗い夜のホテルのバーで、かつて同じ社の特派員として北京にいたことのある彼は「信じがたいことですが……」というふうな前おきをおいて、「人民解放軍」が天安門広場に集まっていた「市民」のなかに戦車で突っ込んだ――という話をしゃべった。「くわしいことは判らないのですが……」彼は暗

い顔でつづけた。

ホーチミンで私が日本に電話をかけたのは、その「信じがたいこと」をくわしく聞きたためだった。何分か経って電話はつながり、「信じがたいこと」は事実であることが判った。

五月末から六月半ばにかけて、私はベトナムを旅して歩いていた。「信じがたいこと」はいくらでもベトナム自体にもあった。今ようやく経済は谷底から這い上りかけている——この私の友人のベトナム人作家の言は信じることができた。しかし、谷底のさまには信じがたいことがいくつもあった。たとえば「女」だ。「女」は、ホーチミンの私のホテルのまえにもいたから、それだけではおどろきはない。おどろいたのは、その天安門広場での「信じがたいこと」をダナンではじめて耳にし、ホーチミンでさらにくわしく聞いたあと訪れたメコンデルタの中心都市カマウのホテルに泊まったときだ。カマウはメコン河に面した、カンプチアの船が出入りする「国際港」の「国際都市」だ。そういう「国際港」「国際都市」には古来「女」がいる。ただ、私が泊まった、終夜停電でランプで夜をあかすカマウ唯一のホテルが、その種の「女」が泊まり込みで仕事をする一種の売春宿でもあったことには、こんなことには慣れていないはずの私も少しおどろいた。信じがたいことだった。しかし、この信じがたいことも、ベトナムという「社会主義国」にこの種の「売春宿」があったと言えば「社会主義国」にもう誰も幻想を抱かなくなつた今でも信じがたいことになるかも知れないが、ベトナムという「第三世界」にそういうものがあつたと言えば当然のこととして受けとられるにちがいない。「女」の「価格」は三百円だった。おどろくべき「安値」だが、それでもベトナムのお金の「ドン」に換算

すると一万ドンになる。公務員の給料が「ヒラ」で五万ドン、えらいさんで十二、三万ドンか。もつとも、ウドン一杯が二、三千ドン。日本での月収三十万円は、決してゆたかでない月収だろう。しかし、ドンになおすと、一千万ドン。信じがたいことだ。しかし、この数字の羅列のなかの何が信じがたいことなのか。――

私は帰途、香港に立ち寄っていた。香港はベトナムからの「経済難民」の殺到で大きわぎしていた。そこに「天安門事件」が起こった。タクシーが「天安門事件」の犠牲者を悼むために黒い布をアンテナにつけて走っていた。あちこちで集会をやっていた。集会では主催者がおどろくほどの金額のカンパが集まった。私は香港でそれほどの「市民」の怒りの表示を見たのははじめてだった。香港の「市民」と言えば、ただ金儲けに専念している「市民」だという評判であった。私もその評判を信じていた。夜、ホテルのテレビジョンで、「BBC」と香港のテレビジョンが共同で行なった討論会の番組を見た。「天安門事件」のあとでさえ、イギリス経済が困難になるという理由でイギリスへの移住をかくなく拒むイギリス政府に対して、これが自由と民主主義の栄えある伝統のある西洋の大国のやり方か、信じがたいことだと、番組のなかで香港の「市民」たちが激しい怒りをぶつつけていた。「BBC」の司会者までが、彼らの皮膚の色がカナダ人のように白かったら、あなた方は容易にこれらの「市民」の移住を許可していたにちがいないと、彼らとともに怒りを政府にむけていた。彼も、信じがたいことだという意味のことを、彼の怒りの表明のなかで述べた。

日本に帰って来たとき、私はまわりの人びとに、これから日本にベトナムから「ポート・ピープル」がたくさんやって来るにちがいない、彼らは「経済難民」だと言った。「経済難民」だから受け入れないという態度を「市民」の側でとらないことが必要だとも述べた。むしろ、後者を言うために前者を言った。私の話は、人びとにははじめ信じがたいことのようにだった。しかし、そのうち、誰にとっても信じざるを得ない事態がやって来た。

6

信じがたいことが起こるのは、それほど手ごわい問題に世界が充滿していることでもあれば、世界各地でさまざまに「市民」がそこに直面していることでもある。そこではすばらしいことも悲惨なことも起こる。この「回顧録でない回顧」のなかで、信じがたいことをも可能にするのは「市民」の力だ、「市民」のたたかいの力だと景気よくおらび上げるつもりは、私にはない。それが根本的に正しいことであつても、そう私は信じているにしても、である。私はただ、ここで自分のありどころを今一度たしかめ、さだめようとしている。「私」であるとともに「市民」であるありどころだ。「私」であることによつてありどころは私につながり、「市民」であることによつて、世界大にひろがる他の多くの「市民」と結びつく。私がどこにいて、何をするのか、どう生きるのか——それが私の言うありどころだが、手ごわい問題に直面するためには、ありどころをたしかめ、さだめる作業がある。その作業が必要だと私が考えるのは、世界が今手づまりに来ているのと同時に、その手づまりを打開する動きが今大きく姿を現わしていると考えるからだ。「壁」が市民の力で破られたことは、そのひとつの大きな例だ

ろう。その動きによって、世界のありよう、歴史はこれから大いに変わる。その可能性を世界は、いや、「市民」は未来に持つ。その大きな変化のときに世界、「市民」双方が来ているように見える。

私のありどころをたしかめる作業の不可欠なひとつとして、「ベ平連」をふり返って考えることがある。それは、私が「市民」のことをほんとうに自分の問題として考え出したのはその運動のなかでのことだったからだ。すべての人にとって、この作業が意味あるものかどうか、そこまでの普遍性を持つものになるのかどうか、私は知らない。しかし、今、自分のありどころを「私」としてもあれば「市民」としてもあるありどころにおこうとする、そのありどころをもととして手ごわい問題に直面しようとする「市民」にとつては、何がしかの意味を持つ。すくなくとも、そうあらしめたいと希って、私はこの「回顧録でない回顧」を書く。この作業にとりかかると私の気持は、「回顧録」を書くには今少しせっぱつまっている。しかし、せつかちなおらび上げは「市民」にふざわしくない。気楽にゆつくり書いて行きたい。

2 「私は『私たち』になった」

1

あのとき、鶴見さん——鶴見俊輔さんが私に電話して来なかったら、という気が私にはする。一九六五年の四月に入ってまださして日数が経っていないころだったと思う。たまたまそのころはまだ生きていた大阪の父親のところに行った私に鶴見さんが自分で電話をかけて来て、ベトナム戦争反対の行動をしないかともちかけた。

そのときまで私は鶴見さんにたしか一度しか会ったことがなかった。『日本の知識人』という私の本を話題にした対談を書評新聞が企画して、その席で私は彼にはじめて会ったのだが、それつきりであとべつに個人的に親しくしていたわけではなかった。だから少しおどろいたが、たいしてびつくりしなかったのは、その年のはじめあたりから、そして、ことに二月の「北爆」の開始のときから、ベトナム戦争と戦争に対する荷担が日本でも大きく取り沙汰されるようになっていたからだ。そのころよく言われていたように、戦争はまず新聞、雑誌、本、テレビジョンなどのジャーナリズムの活動を通じて人びとの視界に入ってきた。戦争の記事や写真はしよつちゅう人びとの眼に触れるところに出ていたし、「従軍戦記」もいくつか「ベスト・セラー」になっていた（「ベ平連」の直接の関係者の著作だけについて言えば、開高健の『ベトナム戦記』）。ことに、そのころのはやりの言い方を使って言

えばテレビジョンが戦争をお茶の間に持ち込んだ。雑誌「世界」も、戦争にかかわつての「臨時増刊」を四月に出していて、私自身もそこに「いま何をなすべきか」と題した文章を書いていた。

私はその短かい文章のなかで、「ベトナム問題はアジアの問題であるとともにアメリカの問題であるという二面をもっている」、「日本人の一人一人が、アジア人として、また、アメリカと安保条約をむすんでいる国の人間として、問題に感じがらめにしぱりつけられている」——その「一人の日本の市民として」、問題のただひとつの解決である「アメリカがベトナムから手をひくこと」を実現するため、日米両国双方の市民が手を組むような行動を提起していた。「どうして、たとえば日本の大新聞がニューヨーク・タイムズと共同キャンペーンをやらぬのか」と私は書いていた。そのことばはさらに次につづく。「日本の総合雑誌がアメリカのそれと手を組まないのか。さまざまな知的交流機関が動き出さないのか。東京とワシントンの双方で、統一スローガンをかけたデモ行進が行なわれないのか。」さらにまた、次のようにも述べた。「アジア人の一人として、その市民としても同じことが言える。東京とワシントンのデモをニューデリーでもやつてもらおう。いや、当のベトナムの市民、知識人の苦しい動きに対して、どうして、私たちはもつと直接的に支援することができないのか。アジアの主だった新聞の共同キャンペーンがそれぞれの政府を動かすこと、それが少しもできないのか。日本の市民の動きが、アメリカの市民の動きとアジアのそれとをむすびつけるカナメとなることはできないのか。」

よくも言つたり——という気が今書きうつしてするのは、私がこれらすべてのことにおいて自分のことばを無責任な言いつばなしのものにしてしまったというからではない。かたちはちがひ、規

模は思うように行かなかったかも知れないが、私は志を同じくする人びととともにことばのかなりな部分を実行したと思う。いくばくかの自負を込めてそうここで書いておきたいが、「よくも言ったり」という気がするのは、そのことばの実行がどれだけしんどいものであったか、しんどいことを必要とすることがらであつたかをそのときには十分にわきまえていなかったからだ。そして、さらに根本的なことを言えば、なるほど私は自分に対しても、他人にむかつて、行動の提起をしていたが、それをどのようにして具体的に始めるのか。私はいわばそのとき人待ち顔で手ぶらで道のまんなかに立っていたようなものだ。そのときそのときの大それた——そうとしか言いようのないことばの集列のあと、私は「もちろん、そのまえに、日本の市民の統一した動きがあるだろう」と書いていた。しかし、もちろん、その動きをどのようにして自分が他の市民とともにかたちづくるのか。それがかんじんの問題だった。

鶴見さんが、私のこの文章を読んだのかどうか、読んで、その上で私に電話をかけて来たのかどうか、私は知らない。たぶん、そうでなかったと思う。それよりは、あのいつか会った面白そうな若い男、あれをかつき出したら案外うまく行くのではないかというぐらいの気持で電話をかけて来たとは、鶴見さんがあとで自分で私に言ったことだし、書いていることでもある。「ベ平連」運動が終つてから、はじめのころをのぞいてずっと「事務局長」をしていた吉川勇一さんが苦勞してまとめ上げた『資料・「ベ平連」運動』（一九七四年・河出書房新社刊）の「序文」として鶴見さんが書いた「ひとつのはじまり」のなかで、「いくつもの水滴があつまつて、川となる」と書いたあと、この「ベ平連という川にあつまつた一つの水滴」として、彼と彼のまわりの人びとの「ベ平連」以前の動きについて書いている。それ

によると、彼はすでに三月はじめに「声なき声の会」の高嶋通敏さんから「北爆」反対の運動を起こそうと提案を受けていた。「声なき声の会」は「一九六〇年五月一九日の新安保条約強行採決の時に、これに抗議するという一点であつまつた人たちの団体」だが、鶴見さんと高嶋さんは「声なき声の会」のほかにも「他の同じような小さい会にいらせて、北爆反対のデモの相談の会をひらこうということになった」——そう鶴見さんは書いています。

そういう経過があつたものだから、あとで「ベ平連」の最初の正式の名称が『ベトナムに平和を！』市民文化団体、連合」という、実状とちがつたものになつてしまふのだが、その相談の会で「五年前の安保反対運動の時よりも若い指導者を求めようということに意見が一致」して、そこで白羽の矢が私に立つたというのが鶴見さんの思惑の理由は、「みな相当にくたびれて」いたのと、もうひとつ、若い人をキモイリ役にして「若い人への輪をひろげよう」ということだつたと彼は正直に書いている。せんじつめて言えば、若くて元気な、のちのやりのことばを使つて言えば、「人寄せパンダ」が重要だつたということだろうか。なるほどこういう「策謀」が彼の突然大阪にかけて来た電話の背後にあつたのかと、今書いていても苦笑したくなるが、私は私で何か人待ち顔に手ぶらで道に立つていたので、私は私なりに「策謀」していたことになるかも知れない。鶴見さんたちのほうが役者が一枚も二枚も上手であつたようだが、それにしても、これはどつちもどつち、勝負はあいこ、ということろだ。

かんじんなことは、鶴見さんの言い方で言えば、多くの人びとのなかで、この年の「三月から四月

にかけて、電話をかけるとすぐ話がきまるほどに米国のベトナム爆撃に対する反対の機運が熟していた」ことだ。「枯葉のこぼれている原に一本のマツチをするように『ベ平連』をつくらうという電話はすぐさま行動となつてあらわれた」と彼はつづいて書いているが、その実感は私にもある。ここでひとつ蛇足としてつけ加えておきたいのは、こういう多くの人びとの気持にもかかわらず本来ならこうしたとき大きな運動を起こす、そのはずの大政党、大労働組合（あるいは、その連合体）、学生運動組織など大組織の運動の動きが、五年前の「安保闘争」でくたびれはてていたのか、きわめて鈍かったことだ。その事態もあつて小さな運動の小さな動きが始まつていたこともある。もつともそのとき大きな運動が大きく動き出していたとしても、私が、あるいは他の市民がスナリそういう動きのなかに入つて行つたかどうかは大いに疑問ではある。

2

そのころ東京に住んでいた私は大阪から帰つてすぐ鶴見さん、高島さん二人に会つた。東京駅に着いてすぐ新橋駅近くの「フルーツ・パーラー」（それともあれはそういう今ではもう時代おくれになつた名称の店ではなく、ただの「喫茶店」であつたか）に出かけてのことである。鶴見さんのさつきの文章によると、「あとでチラシに印刷された運動のプログラムを小田はその時すでに書いてきていた」そうだが、私の記憶にはない。せつかちでそして怠け者の私のことだ、あるいは、新幹線の列車のなかで慌ててでつち上げてもつともらしく書いて来ていたのかも知れない。何かの「声明」文など、前半書いただけで読み上げることになつてしまつて、あとは頭のなかで勝手に文面をこしらえ上げて、

読み上げるといふような「勸進帳」めいた芸当を「ベ平連」の運動のなかで私はあとでときどきやった。はつきりおぼえているのは、鶴見さんたちの話を聞いて、『ベトナムに平和を！』市民連合」という名前を私が考え出したことだ。テーブルの上の紙ナプキンをとって、私はそう書いた。高嶋さんがそれを見て、「略して『ベ平連』だな」と言った。私は奇妙な略称だと思った。この二つのことははつきりおぼえている。

実際、「ベ平連」という略称は、最初はなはだ通りがわるかった。こんな便所の脱臭剤みたいな名前をつけてそれだけでもこの運動のセンスのわるさが知れると言われたし、逆に、こんなハイカラな名前をつけること一事でこの運動がいかに日本の大衆からかけ離れた運動であるかを力説した人もいた。そのうち運動とともにことばがやり出して通りがよくなったのか、もう名前でもやかく言う人はいなくなつた。逆に「いい名前ですね」とほめる人が多くなつた。私は私で、世の中、万事そんなものかいなと思つていた。

「ベトナムに平和を！」の大きな共通の旗じるしの下、あと二つ「ベトナムはベトナム人の手に！」「日本政府は戦争に協力するな」といふような旗じるしを定めたのはもつとあとのことだが、それでもそのときも似たようなことを三人でしゃべつていたように思う。話がそれできまつて、あとは三人がそれぞれ自分の知己、仲間電話したり、ビラをつくつて撒いたり、記者会見もたしかしたはずだが、このあたりのことはよくおぼえていないし、書き残してもいない。忙しかつたせいもあるにちがいないが、もうひとつ、私は自分たちが準備しているデモ行進が一回きりのものでないにせよ、さして長つづきするものだとは考えていなかったからだろう。もつと端的に言つてしまえば、これは臨時

の、もつとまでも本格的なものが始まるまでのつなぎの運動だと内心考えていたにちがいない。私に突然押しつけられたキモイリ役にしても、仕方がない、乗りかかった舟だ——ぐらいの気持で引き受けていた。そのうち誰か代りの人が出て来るだろうし、いざとなれば降りてしまえばよい——それが正直なところでの私の気持だった。

あちこち連絡しあつたおかげで、最初のデモ行進への「呼びかけ人」も二十一人、「言いたいことはただ一つです——ベトナムに平和を！」の書き出しで始めた「呼びかけ」の末尾に並べることができた。その人たちの名前を肩書きも当時のままにして次に書き並べておく。「小田実（作家）、堀田善衛（A・A作家会議）、開高健（作家）、佐藤忠男（映画評論家）、武井昭夫（新日本文学会）、福田善之（劇作家）、深作光貞（カンボジア研究者）、杉山龍丸（玄洋社国際部長）、古山洋三（わだつみ会）、高橋和巳（作家）、瀬藤多恵子（主婦）、吉田喜重（映画監督）、浮田久子（主婦）、篠田正浩（映画監督）、高戸要（キリスト者）平和の会、井出孫六（編集者）、後藤宏行（思想の科学研究会）、小松左京（作家）、野村浩一（中国研究者）、久保圭之介（映画プロデューサー）、白川充（編集者）」

一見してよく言えば多土済々、わるく言えば、いや、ことの実態に即して正直に言えば無秩序のゴタマゼ。「左」もいれば「右」の——そうみなされて来ていたはずの玄洋社の「国際部長」までもが入っているからユカイである。もつとも「左」から来た人は、初日のデモ行進にやって来てこのゴタマゼぶり、「プチブル小市民」ぶり、インチキクさきぶりに呆れて帰って二度とやって来なかつた人もかなりな数いた。他にも名前を貸しただけでまるつきり顔を出さなかつた人もいるし、そのうち来なくなつた人もいて、おしまいまでとにかくつきあつてくれた人はいったい何人いたのか。そして、こう

今あらためて書き並べてみてあらためて気がつくのは、かんじんの言い出しべえの名前が私の名前はあつても鶴見さんと高島さん二人の名前がないことで、ここらは新しい人でやりたい、すくなくとも世にそういう印象をあたえたいという鶴見さんたちの深慮遠謀によつたのかも知れない。ずいぶん考えたものだと感じるが、何んでもできるかぎりおもてに出して卒直にやるという私の流儀から言うと、考えすぎだという気もしないでもない。鶴見さんたち二人にこのことではじめて会つたとき、私はなるほど運動を長年やつて来た人はこんなふうに見えるのかとしきりに感心していたが、二人は二人で私のいかにも素人っぽい、型破りな、ときには型破りすぎるやり方、考え方におどろきもすればひやひやしていたにちがいない。しかし、こうした流儀のちがいは両者あつてよかつたと運動のなかで思つたし、今思い返しても思う。

「呼びかけ」の文面は、さっきの書き出しのあと、あらまし次のようなものだった。「この声は、私たちのみでなく、世界のほとんどすべての人間、いや、人類の声でしょう。アジアの地のこの一角、東京で、私たちは今この声をあげる。この声は小さいかも知れない。しかし、こだまはこだまをよんで、世界に、すみやかに、着実にひろがって行く。たとえば、アメリカに、中国に、もちろん、ベトナムに。そして、その声は私たちの政府を、動かすだろう。……／＼私たちは集まり、集会をひらき、歩く。私たちは、ベトナムについて、おのおの言いたいことをもっている。それを声にだして言おう。思い思いのプラカードを立てて、それを全世界に示そう。二時から四時までの二時間、清水谷公園からアメリカ大使館まえをへて、土橋まで……日本の一角、ベトナムの所在するアジアの一角を、私たちは歩く。／＼『私たち』というのは、つまり、この文章を読むあなたのことです。来て下さい。ベトナム

に心をはせる日本人の一人として、人類の一人として、声をあげて下さい。……」

長々と引用したのは、このあらかた私が書いた文章のまずさかげんを示すためではない。ただ、ここに、「ベ平連」の運動の気がまえと行動の流儀が示されているように見えるからだ。気がまえは、大きく世界大に横にひろがるよく言えば普遍、わるく言えば誇大妄想、流儀はよく言えば自発、自由平等、わるく言えば、勝手気まま——そうしたものがこの文面によく出ているにちがいない。そして、コッケイなのは、これだけの世界大の普遍をうたい上げながら、かんじんのビラの日づけが「昭和四十年四月十五日」であつたことだ。この「昭和」というケツタクソわるい日づけの表示は、四月二四日、デモ行進の当日歩きながら街路で撒いたビラからはさすがに消えていたが、それでもそのあともビラなどにとまどき姿をあらわしていた。

そして、もうひとつ気がつくのは、かんじんの「市民」ということばがそのビラにはまるつきり出ていなくて、それが出現するのは、その当日撒いたビラからだつたことだ。こちらのほうの「呼びかけ」の文章も、私があらかた書いた。その書き出し。——

「私たちはふつうの市民です。／ふつうの市民ということは、会社員がいて、小学校の先生がいて、大工さんがいて、小説を書く男がいて、英語を勉強している少年がいて、／つまり、このパンフレットを読むあなた自身がいて、／その私たちが言いたいことは、ただひとつ、『ベトナムに平和を！』」

これも決して上手な文章ではない。気恥しさをこらえて引用するのは、「市民」ということばが「ふつうの市民」というつながりのなかでここに出て来ているのと、もうひとつ、さつき引用したビラの文面同様、すくなくともそれまでのありきたりの非「市民」的、いや、反「市民」的文章、あるいは、

そうした文章をうみ出す運動の流儀から手を切った、それとは根本的にちがうものをつくり出そうとする意図を私はそこに込めていたからだ。実現した文章がこの程度のものであったことに私は赤面するほかはないが、すくなくとも意図としては、私はあくまで「私」のものでありながら、そこに基本的文章を書こうとしていた。「アツピール」というようなそれまでふつうに使われていたカタカナ英語をやめて「呼びかけ」とし、「発起人」を「呼びかけ人」「世話人」というようなくだけた言い方に変えたのもその私の「変革」の志あつてのことだったが、こちらのほうではかなり私の「変革」の志は報われたらしく当時奇異なひびきをもったにちがいないこれらのことばがもうふつう一般に使われることばになって来ているようだ（このときではなくてもう少しあとのことだが。今はもう誰でも抵抗なく使う「しくみ」とか「ありよう」とかを私が文章のなかでさかんに使い出したのも、同じ「変革」の志によつてのことだ）。

3

さて、ウヨ曲折いろいろあつて、当日、四月二四日（土）、午後二時、会場の東京赤坂の清水谷公園には、鶴見さんや私がおどろくほどの人数が集まった。私がい出しべえというわけで、何かしゃべれということになったが、だいたい私はそんなところで「政治演説」などしたことがない。何を言ったのか、さっぱり記憶がない。いやなことは人間すぐ忘れるのが常だから。ろくでもないおしゃべりをやつてのけたのだろう。ただ、とりえはそういう集会でのありきたりのアジ演説でなく、自分のいつもの語

り口でしゃべった——ことだ。これだけはたしかだと言えるのは、あとで誰かに、「あんな演説はないよ」とほめられたのかけなされたのか判らない評をされたからだ。開高健さんが、これもまた戸迷いしたような表情と口調で、彼の「従軍体験」に根ざした南ベトナムの情勢報告をやつてのけた。あと、誰でもしゃべってくれということになって、いや、私がそう言い出したのだと思うが、小中陽太郎さんが「失業者代表」を勝手に名乗つてしゃべつて、あとで「左」からの参加者から、なんと不真面目、不キンシンな連中だ、とヒンシュクを買つたことはおぼえている。

そんなことより大事なのは、そのときにはまだ「ベ平連」の運動はでき上つていなかったことだ。さつきから引用して来た当日用のビラ（「パンフレット」と文中に書いていたが、たしかにふつうのビラより少しましなのを、私が当時勤めていた予備校に頼んでつくつてもらつたのだが、正直なところ、やはり、あれはビラだ）には、「呼びかけ人」として『ベトナムに平和を！』市民文化団体連合」の名が出ていたが、その名称には「つまり、ふつうの市民」とつけ加えがついていて、「ベ平連」はその「ふつうの市民」がデモ行進して歩いてくれないとでき上らないしかけになつていた。そして、そんな名称がそこに書いてあつたところで、これから何をどうするのか、いったいつづけてこんなことをして行くのかどうかも決まっていなかったのだからたいして意味はない。今でこそこういうやり方は市民のあいだに定着して来ているようだが、そのころにはかなり奇妙なたちのものであつたようだ。そこからデモ行進して歩き、あと東京駅八重洲口の国鉄労働会館でしめの会を開く——ということぐらひは決まっていたが、ま、とにかく歩こうや、で、このウゾウムゾウ、烏合の衆は歩き出した。

デモ行進の様子は、新聞記事にくわしい。たとえば、翌日の朝日新聞。見出しは「きのう文化人

らデモ」。記事そのものは「作家小田実さんらの呼びかけで政党や労組などに属さない人たち約千五百人が……」とあって、あと集会の様子を述べたあと、「勤め帰りの娘さんたちも加わって白い風船を手に新橋まで行進、道行く人に『ふつうの市民として参加して下さい』と呼びかけた」とつづく。毎日新聞も同じような記事を出していたが、「面白いのは、こちらの見出しは『ベトナムに平和を』——市民のデモ行進」であつたことだ。そして、こちらにも「政党、労働団体に属さない市民たち」とか「白い風船、花束などを手に」とか、朝日新聞と似たような表現があつた。こういうことばを見ていると、そのときのデモ行進がどういう眼で見られていたかが判る。何かしら風変りな、戸迷いを感じさせるデモ行進であつたようだ。

風船や花束は以後「ベ平連」にデモ行進と言わず運動全体にずっとつきまとう「イメージ」であるようだが、私には残念ながらそのときの二つにまつわたりの記憶はない。ただ、デモ行進の隊列に入ってくれと私自身が懸命にマイクを使って歩道でものめずらしげに隊列を見る人たちに呼びかけたことはおぼえている。それもそれまでのデモ行進があまりやらなかつたことだ。やってやれと意識して、いや、「変革」の志をもつてやり始めたことだから、記憶にそれだけあざやかなのだろう。そして、たしかに「勤め帰りの娘さん」と見える若い女性が何人か、私の叫び声に誘い込まれたのかどうか知らないが、隊列に入つて来た。

もうひとつはこのデモ行進で特異だつたのは、デモ行進の先頭を走る先導車がキャデラックだつたことだ。それだけでも、このデモ行進は風変りなものに見られたにちがいない。アメリカ合州国の新聞に「キャデラックを先頭にした反米デモ」というふうに記事が出たように記憶する。べつに意図し

てやったことではない。「ベ平連」の運動がとにもかくにも始まったところでまさに自然なかたちで「事務局長」になってしまった映画プロデューサーの久保圭之介さんがたまたま持っていた車をほかに車を持つている人がいなかったので先導車に仕立て上げただけのことだが、その久保さんがたまたま持っていた車がたまたま中古、格安のキャデラック（ああいう「ステイタス・シンボル」でガソリンを撒いて走るような車は、中古となるとめっぼう安くなる）であっただけのことだ。のちに久保さんはこの格安のキャデラックを売って同じように中古、格安のクライスラーを手に入れるのだが、結果としてしばらく毎月一回やり始めた「ベ平連」の定例デモ行進の先導車はクライスラーだった。

話を戻すと、四月二四日のデモ行進のあと、国鉄労働会館に参加者の何割かの人は集まり、とにかくこの行動をつづけようと思った。これで「ベ平連」の発足となったのだが、べつにそこで「代表」とか「事務局長」を決めたおぼえはない。すべてはいつのまにか自然体で決まってしまうことだ。そこでとりあえず決めたことは、次のデモ行進の日どりだけではなかったのか。この市民運動をつづけるなら、いつでも成員が顔をあわせることのできる労働組合や学生運動とちがうのだから、「市民」はまさに「二期一会」の存在なのだから、次にみんなが集まる日どりと場所を決めて行くよりほかに継続の方法はないとつぎに考えた私が自分から何か息せききった気持ちで言い出したことだけは、私は今もよく記憶している。

4

私のがちになって『何でも見てやろう』という本のなかに体験をまとめ上げて書いた貧乏旅行をし

たあげくに日本に帰り着いたのは、一九六〇年の「安保闘争」の最中だった。しかし、私はその「闘争」のなかにまるつきり参加していない。理由はおそらく二つあって、ひとつは、まず、貧乏旅行のはてにからだがまったく参ってしまっていたからだ。毎日、仕事のあいまに寝てばかりいた。そして、もうひとつは、何かあの「闘争」について行けないものを感じとっていたからでもある。そのときの異和感は自分でもそのときよく判らなかつたし、今でもよく判らないが、おぼろげながら言えることは、それが何かただ日本のことだけを考えている——そういう「闘争」であるように感じとられていたのではないかと思う。

半ば寝ながら貧乏旅行の体験を本に書き、世に出したら、奇蹟的によく売れた。今では想像できないことだが、あのころは「右」も「左」も、「日本はダメな国です」の風潮が世にはびこっていた時代だった。今からふりかえって考えてみると、私は、その風潮のなかで、日本には日本の価値がある、と懸命に書いたのではなかつたかと思う。ただ、それを私は偏狭な「ナショナリスト」（は、今世にはびこっている）の視点で書いたのではない。それは今誇つて言えることだと思う。いろんな国、いろんな民族にはそれぞれ価値がある、同じように日本にも日本の価値がある——と私は書いていた。あとでこの本は韓国で「海賊出版」されて、「チョクム」（少しばかり）「ベストセラー」になった。日本人が自分の国のことをいばって出した本なら、そんなことになるはずがないにちがいない。韓国人は韓国人のこととして、この本を読んだ——そんなことを後年韓国へ行ったとき言われたことがある。韓国人からもファン・レターが来た。もつとも私自身の国の「左」の人たちにはそんなふうには私の本をとらえなかつた人が多かつたのかも知れない。あとで長年「ベ平連」の運動の仲間になる「左」の人た

ち——私はこの「『左』の人たち」という言い方を愛して使うのだが、その人たちは、「また新^{あらた}手の右翼が出て来たと思つた」とよく私に言つたものだ。そういうときの私の答はきまつていた。「今だつて、わたしは『右』だ。きみがもし『左』だと自分のことを考えるなら。」

その「日本には日本の価値がある」の気持がこうじて英文の雑誌を出そうと考え出したのは、それまでの体験からあまりにも日本が、また日本人が誤解されている、あるいは不当にバカにされていると感じていたからだ。なにしろ、『タイム』というアメリカ合州国を代表する雑誌に、高名なアメリカ合州国の日本研究者が「日本人はまだ子どもである。ときには暴れ出して何をするか判らないが、我慢して彼らの成長を待ちましょう」と「安保闘争」にかかわつて書いていた時代だつた。これでは困る、なんとかしたい、と私は思つた。またアジアには、新しい憲法の下で、過去のあやまちをくり返すまいと努力している日本人たちがいる。それこそがこれからほんとうの日本を形成する人たちだということを知らない——アジアを貧乏旅行しているあいだに私に判つて来たことのひとつがそういうことだつたが、そういう日本人のひとりである私はこの事態もなんとかしたいと思つた。あれやこれやあつて、私は英文の雑誌《Japan Speaks》を出版しようと考え出して、そのためのつきあいの輪をひろげていた。その輪の中心に「事務局長」格としてあつたのが前記キャデラックの持ち主の久保さんだつたのだが、彼が勝手に《JSP》(Japan Speaks Production)と名づけたこの輪には、久保さんの映画プロデューサーという職業柄、気むずかしい映画監督もきれいな女優さんも直接間接にかかわり、私も作家やら編集者やらの友人を連れて来たりして当時としてはかなりはなやか、にぎやかなものになつていたかと思う。彼の中古、格安キャデラックで、深夜ドライブに出かけて、どこ

かどうまい料理を食って朝がた帰るといふ当時としてはゼイタクなこともときどきやっていた。

私なぜこの当時としてはかなりはなやか、にぎやかな人間のつながりのことを少しくわしく書いたのかと言うと、この輪が鶴見さんや高島さんのような、あるいは、「声なき声の会」のような、私たちが彼らのことをいつもからかつて呼んでいた言い方を使って言えば「マジメ市民」のつながりとともに、そしてまた、明確に「左」のイデオロギーを持った、これもまた私のカラカイの言い方で言えば「政治集団」とともに、三者がからみあいこんがらがりながら「ベ平連」の運動の形成を始めていたからだ。私のカラカイの言い方を今少しづつづけて言うなら、この私やら中古、格安のキャデラックの持ち主やらを中心としてかたちづくられた人間の輪はさしずめ「インチキ市民」の輪ということになるが、「マジメ市民」「政治集団」「インチキ市民」、この三者がおたがい異和感、戸迷い、ウンザリを感じあいながら、ただ一点、それこそ「ベトナムに平和を！」の志でつながって動き出したのが「ベ平連」の運動だった。

よかったのは、そのとき、「マジメ市民」が「インチキ市民」の「グルメ」志向（と言ったつて当時のことだ、たかが知れているが）を非難したりすることもなければ、「政治集団」がキャデラックを先導車に使うとは何ごとぞと怒り出すこともなければ、「インチキ市民」が、このものの判らぬマジメ朴ネンジンめ、石頭の教条主義者め、とファンガイしたりしなかったことだろう。ことわっておくが、みんながそれほどもの判りのよい人格者であったわけではない。ただ、どのようにして一日でも早く「北爆」をとめるか、日本の荷担をやめさせられるか——で、みんなはおたがいにせつぱつまっていたし、忙しくもあつた。あえて挑発的なことを言えば、未来のいつの日かの「日本革命」をめざ

しているなら、革命の方策、戦略戦術について人はカンカンガクガクの議論をはてしなくやってのけて、あげくのはては呆気なくケンカ別れすることができただろう。そんな「革命」諸党派はどこにもいっただっているものだ。しかし、私たちの場合、問題はもつと具体的でもあれば切迫もしていた。それはそれだけ問題を解決できないもどかしさもあつたということだろう。そこにおいても、私たちはちがいをこえてつながっていた。開高健がそのころ書いた文章を、ここに収録しておく。

「雨の降る日にビニールの傘にプラカードをぶらさげて清水谷公園から新宿公園まで歩いたこともあつた。ぼそぼそノロノロ、ときどき発作的に叫んだり黙り込んだりして歩いていると、稀薄、徒勞、非力、むなしさの感情がのどもとにこみあげてきた。家にいて小説を書くか、考えるかしているほうが、よほど私は濃厚であり、凝縮できた。『平和』はあまりにも手垢にまみれたような日本語であつた。自分の行動や感情を『ヒューマニズム』という言葉で考えることも私は避けた。『平和』はあまりにも巨大で稀薄であり、私の皮膚はあまりに迷走しやすく、自分を包みすぎている。……」（「朝日ジャーナル」65・9・19）

こうした気持は、それこそイデオロギーのちがいが、有無をこえて、私たちは共有していたにちがいない。しかし、それでも、私たちはデモ行進していた。開高自身、「ニューヨーク・タイムズ」へ「反戦広告」を出すため、書きまくり、走りまくっていた。彼はなかなかしたたかな作家だったが、そのときの彼を支えていたのは、抽象的な理屈ではなかった。彼自身が書いていた。「反響があつた。ひどく反響があつた。高校生、大学生、主婦、有名人、無名人、さまざまな人びとが手紙や現金書き留めを送つてきはじめた。『イイコトダが無益ナコトダ』としばしばおそいかかる虚無の穴の内省に私

2 「私は「私たち、になった」

はたたずみつくしていることができなくなった。私は「私たち」になった。」（『東京新聞』65・8・28）

こう書いていてまさに「回顧録」を書いている気になれないのは、今、たとえば、ベルリンの「壁」を破った、プラハで一党独裁の体制を打破した「市民」たちの動きのことを考えるからだ。彼らも、イデオロギーのちがいがいい、あるいは有無をこえたつながりをつくるなかでひとりの「私」が「私たち」になったときに、大きくことをゆり動かし、新しくことを始めた。

つづきは製品版でお読みください。